Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

No.9, July 2007

〒467-8501 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１番地　Tel 052－872-3452　Fax 052－872-1531
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

所長あいさつ 「就任にあたって」

名古屋市立大学人間文化研究所長　福吉勝男

この4月に所長に就任いたしました。就任の挨拶に代えて、人間文化研究所のこれまでの主な活動の紹介と今後の予定についてかんたんに述べておきたいと思います。

本研究所は、教育研究の一層の充実と地域社会への貢献を目的として、2005 年 4 月に設立されました。「人間・地域・共生」をキーワードに学際的な研究活動の推進を設置の趣旨としているところです。

これまでの主な研究活動の第1は、文部省の科学研究費、大学の特別研究奨励費、名古屋市の委託研究などを関係経費として行なったプロジェクト研究の推進ということです。2005 年度は 5 件、2006 年度は 7 件でありました。ちなみに 2007 年度は次の 4 件です。①「越境する文学の総合的研究」、②「名古屋の観光まちづくりと観光に関する学際的調査研究」、③「18歳のハロー・ファミリー：次世代育成支援のための基礎的研究」、④⑴「障害児の発達を支援する親子教室の効果と学習プログラム開発」⑵「障害児を持つ親の子育て支援のあり方と社会資源の開発」というタイトルのものです。昨年度までプロジェクト研究の成果を活かして、いくつかの講演会やシンポジウムを市民とともに開催してきました。これらの研究状況や成果についての概要は、「研究所年報」や「ニューズ・レター」で公表しています。

研究活動の第2として、年 1 回の「研究所年報」の刊行を指摘しておきます。当然ながらこれまでまだ2回しか刊行していませんが、各号で特集を組んだ点が特色といえるでしょう。第 1 号は「宗教と共生」を特集に組み（2006 年 3 月刊行）、第 2 号は「トランスナショナリズム」を特集としました（2007 年 3 月刊行）。グローバル化が急速に進行するなか、ナショナリズムを意識しつつナショナリズムを超え人々がどう共生を実現していくのか、そのさい宗教のはたす役割と機能はどこにあるのか、こうしたことへ暫定的に答えを出すことを問題意識の前面に掲げた意欲的な論文を多数収録することができました。第 3 号（本年度末刊行予定）では「福祉」を特集に組む予定で、現在意欲的な論文の掲載を準備しているところです。

他には、専門分野が多岐にわたる本研究科の教員間および教員と大学院生間の研究交流の一環として月 1 回程度、月曜日に実施してきた「マンデーサロン」、情報誌「ニューズ・レター」の発行（年 4 回程度）も貴重な活動でありました。

今年から来年にかけて、プロジェクト研究の推進と「研究所年報」の発行等を軸としつつ、同時にいくつか新規事業を行なう計画をたてています。第 1 は、書店の「丸善」（栄店）と連携し、同店4階の喫茶店を会場にして、＜Human&Social サイエンス・カフェ＞を実施することです。本研究科の教員が自らの研究の内容を分かりやすく市民に説明し、それをめぐって議論する場です。この事業は既に実施にうつされ、その第 1 回は 6 月 17 日（日）に 20 名余りの市民の参加のもとで好評裏に終了しました。月 1 回開催の予定で、来年 3 月分までスケジュール（講師、タイトル、実施日など）が確定済であります。第 2 は中日新聞や朝日新聞等と連携して事業を推進することです。例えば、市民向けの連続講座や、比較的少人数の受講生を対象としたセミナー等が考えられるでしょう。そして第 3 は「研究所叢書」として学術図書を毎年継続して出版することです。

研究所の発展のために力を尽くしたいと考えているところです。皆さんのご支援をよろしくお願いいたします。

共同研究プロジェクト発進！！

2007 年度の研究所共同研究プロジェクトが発進しました。以下に概要をご紹介いたします。

□ テーマ：越境する文学の総合的研究

研究代表者：土屋勝彦（人間文化研究科　教授）

研究分担者：田中敬子（同教授）、谷口幸代（同准教授）、山本明代（同准教授）、沼野充義（東京大学大学院人文社会系研究科　教授）

研究概要：英語圏、独仏語圏、ロシア・東欧語圏、日本語圏における過去および現在の越境作家たちの歴史的文化的な役割とその方向性を考察し、その文化的営為の諸相と意義を明らかにすることを目的とする。今年度は、日本語圏における越境作家たちのシンポジウムを開催する。多和田葉子氏、リービ英雄氏、ゾペティ氏、水村美苗氏がパネラー候補者であるが、場合によっては、島田雅彦氏、堀江敏幸氏、松浦寿輝氏らを招待する。沼野充義氏の講演会も行う予定である。また国内外で越境文学関係の資料収集と整理を行う。（科学研究費補助金基盤研究（B）採択）

□ テーマ：18 才のハロー・ファミリー：次世代育成支援のための基礎的研究

研究代表者：石川洋明（人間文化研究科　教授）

研究分担者：安藤究（同准教授）、山田美香（同准教授）、久保田健市（同准教授）

研究概要：研究者の立場から次世代育成支援に貢献する目的で始めた研究も 3 年目を迎えるが、昨年度は市子ども青少年局のご協力のもと、家族観育成講座を 4 回、および大規模調査 2 つを含む 3 調査を実施できた。本年度も、家族形成のための若者へのメッセージの研究および調査のデータ分析を継続しておこない、家族観講座のバージョンアップや行政の施策へのフィードバック、および市民向けシンポジウムなどの形での研究成果の社会還元をめざす。

□ テーマ：名古屋の「観光まちづくり」に関する学際的調査研究

研究代表者：山田　明（人間文化研究科　教授）

研究分担者：服部幸造（同教授）、吉田一彦（同教授）成田徹男（同教授）、阪井芳貴（同教授）谷口幸代（同准教授）、堀江孝司（首都大学東京大学院人文科学研究科　准教授）

研究概要：人間文化研究科の特色を生かして、人文社会科学の諸分野から、名古屋の観光の現状と課題について学際的に調査研究して提言を行う。学際的な共同研究の成果を学部総合科目「観光」にも反映させていきたい。この共同研究は学部教育だけでなく、名古屋市の重要な行政課題である観光振興について政策提言を行うことにより、研究科・研究所の地域貢献推進に寄与できる。

□ テーマ：

1. 障害児の発達を支援する親子教室の効果と学習プログラム開発（継続研究）

2. 障害児を持つ親の子育て支援のあり方と社会資源の開発(新規研究)

研究代表者：滝村雅人（人間文化研究科　教授）

研究分担者：穐丸武臣（同教授）、野中壽子（同教授）、奥平俊子（同准教授）

研究概要：一昨年度より、軽度発達障害と診断されている学齢前の子どもと保護者を対象に親子教室を開催し、対人行動発達、運動発達、生活動作発達等の促進を目的とした集団活動における効果的学習プログラムの開発と、地域で生活する障害児と保護者への公的支援策の必要性を提言するための研究を行ってきた。この研究から、特に能動的な活動の重要性が認識され、また一方で保護者には子育ての上で様々な葛藤があることが判明した。そこで、今年度も集団活動による研究を継続しつつ、上記の現状から、障害児の親の子育て支援のあり方についての研究を平行して行うものである。この親の支援については、①感情のカタルシスにより精神的な負担感の軽減と情緒の安定をはかり、親のエンパワメントの実践をめざすことと、②具体的な日常生活の問題に対する相談援助を行う、ことに重点を置き、親によるフリートーキング及び必要に応じてケースワーク・グループワークを行うものである。それらの記録を基にして障害児を持つ親の真のニーズに沿った子育て支援策の提言と、新たな社会資源の開発を目的とするものである。

ランジャナ・ムコパディヤーヤ人間文化研究科准教授が 2005 年に上梓された『日本の社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理—』（東信堂刊）が日本仏教社会福祉学会の「第 1 回学術賞・奨励賞」の奨励賞を受賞されました。

授賞式は 9 月 7 日の由。

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

マンデーサロン特集

マンデーサロン

本研究科･学部の教員が自らの専門研究の内容を話し、それを話題にして教員間、また教員と大学院生間の研究交流を行うことを目的としたサロンです。月1回開催を基本としています。市民学びの会(仮称)のメンバーも参加されています。

第7回
テーマ：「抑うつ的音楽聴取に伴う気分の変化―抑うつ傾向と聴取音楽に対する好みの検討―」
講師：古賀弘之(人間文化研究科　講師)
日時：2007年5月14日(月)

毎回入れかわり立ちかわり先生方から、全くの門外漢にもわかりやすく、それぞれのご専門の話を聞かせてもらえるマンデーサロンには、第1回から私はほとんど毎回参加させてもらっている。今回も気楽に参加したら、福吉先生から感想文を書くよう依頼されてしまったので、つたない文ではあるが敢えてここに感想を述べることとする。

今回は昨年度と大きく違ったことが二つあって、そのひとつは会場が広くなったことと、もうひとつは参加者の顔ぶれが一変したことであった。昨年度は人間文化研究所で、いつもお茶を飲みながら、サロンそのものアットホームな雰囲気で行なわれていた。しかし本年度は広い会議室で開催され、参加者も増えた。というより参加者が多いと予測されていたから広い会議室でということであろうか。

実際確かに参加者は昨年度より多かったが、その顔ぶれは一変していた。それは一般市民とおぼしき方々の参加が多く、先生方の顔ぶれが昨年までとは少し違っていた。昨年常連だった多くの先生方のお顔がなく、ちょっとさびしかったし院生の参加が私一人だけだったのはもっとさびしかった。私はこの変化がよいとか悪いとか言える立場ではないのでコメントは差し控えるが、マンネリ化を嫌い、よりよいマンデーサロンにしようと努力されている先生方にはエールを送りたい。

つぎに今回の講演の内容について述べると、私の知的好奇心をおおいに満たしてくれた。もちろん私は音楽療法については全くの門外漢ではあるが、音楽は大好きである。好んで聞くのはクラシックで、作詞･作曲にも興味があり、自作曲を自分のホームページで公開したり、CDアルバムも自作したりしている。また、以前民間会社の研究室に勤務していたとき、QC(品質管理)活動の一環として不良製品の原因究明のため、分散分析や実験計画法を手がけたことがあった。つまり不良品の原因は作業者か、装置か、原材料か、など多数の因子が考えられる場合、ラテン方格を組んで実験計画を立てたりした。

本講演は学生がクラシック音楽を聴くことにより、どのように気分変化するのか、という内容であり、その手法として分散分析を使われたということが興味深かった。最後に、かなり初歩的でしかも無遠慮な質問にもかかわらず、親切丁寧にお教えくださった発表者古賀先生に改めて感謝してペンを置く。

＜大学院博士前期課程2年　岩瀬彰孝＞

第8回
テーマ：「ダム問題の社会学―変わる社会認識と変わらない問題構造、そして、新たな上下流間関係の模索へ―」
講師：濱本篤史(人間文化研究科　講師)
日時：2007年6月11日(月)

今回のマンデーサロンは、本学に今年度着任されたばかりの濱本篤史講師（環境社会学）のご報告であった。フレッシュな先生のサロン登場とあって、早くから注目を集めていた。「ダム問題の社会学―変わる社会認識と変わらない問題構造、そして、新たな上下流間関係の模索へ―」と題して、ダム調査歴、ダム建設の概要、ダム問題の構成と問題構造、住民の位置関係、課題等をお話しいただいた。

濱本先生は1990年代後半から日本各地のダムや中国の三峡ダムを調査研究されている。本サロンではパワーポイントを使用して、ダム建設の現場写真や図表をもとに、ダム問題をわかりやすく丁寧に説明された。写真の中でも「旧徳山小学校」の落書き写真や「徳山ダムの建設中止を求める会」の写真が印象に残った。日本はダムの建設数が2,759にのぼり、世界でトップ5に入る「ダム王国」であるとのお話にも驚いた。

佐久間ダム（1956年完成）や黒部ダム（1963年完成）に代表されるように1950年代から60年代はダム建設の黄金時代であった。しかし、1990年代半ば頃からは「無駄な公共事業」として社会的批判を受けるようになったという。濱本先生は、私たちの記憶にも新しい2001年の長野県知事「脱ダム宣言」、2006年の滋賀県知事「ダム凍結宣言」などの例を示され、具体的にダム建設が冬の時代に突入したことを説明された。その背景には水需要の伸び悩み、治水効果への疑問、生態環境への影響、政・官・財の癒着構造による国民の不信感等がある。

また、ダム問題は局地的対立構造（事業者対予定地住民）から社会的に広域な展開（下流地域住民もその構造に参入）へと変化してきた。

濱本先生のお話で興味深かったのは、ダム計画をめぐる社会問題の変容と予定地住民との関係性であった。確かにダム計画をめぐっては、戦後直後から今日まで、社会問題の性格は変容している。しかし、たとえ「開発の時代」であっても「環境の時代」であっても変わらないのは、「水没予定住民」という犠牲者の存在が一貫して軽視されているということである。 住民が経験した精神被害やアイデンティティの問題も興味深かった。ダム事業というのは最低でも数年がかり、長期化すれば数十年かかる。住民との交渉・建設工事の遅延による事業の長期化が原因で、住民の中には「一体自分はこの何十年、何をしていたのか。自分は何をやっていたのか。」と「自分」の存在がわからなくなる人や精神が破綻する人もいるという。このほか家族問題の発生もあり、水没予定地にとっての現実経験は深刻である。今回のご報告から、ダムの公共性とは何かを考えさせられるとともに「公共事業は、犠牲となる水没地への配慮が必要である」ことを教えられた。

濱本先生は落ち着いた、爽やかなトークで、聴衆を魅了した。機会があれば、中国の三峡ダムについてもお話を伺いたいと思う。環境社会学という学問を身近に感じた今回のサロンであった。

＜大学院博士後期課程1年　山田陽子＞

第9回

テーマ：「紛争と和解の人類学へむけて
―ティモール南テトゥン社会におけるフィールドワークをもとに」

講師：福武慎太郎
（人間文化研究科　講師）

日時：2007年7月9日（月）

最近市立大学で企画されている市民サービスに関心を持って、勉強させて頂いている一市民です。今回の福武先生の講義”紛争と和解の人類学へむけて”に参加させて頂きありがとうございました。

小生は今回で本講座2回目の参加です。ゆったりとした会議室で分かりやすいお話を聴くことができ、又、質問もしやすい雰囲気は本当に学生時代のゼミに参加しているようで、楽しい時間を過ごさせて頂いております。工学部卒、メーカーでの製造管理40年の頭は…視野が狭く（家内には常にそう言われている。）、従って、学生時代・サラリーマン時代にじっくり勉強しなかった分野、人文学・経済学・医学…等々の講座を楽しく受講させて頂いています。

＜平塚秀雄（市民学びの会からの参加者）＞

Human & Social サイエンス・カフェ

本研究科・学部教員が自らの研究内容を市民に分かりやすく話し、懇談する試みです。丸善・栄店と連携して今年度からはじめた新企画です。月 1 回・日曜の開催(場所:丸善 4 階/カフェ・グラシュー)を基本としています。

第 1 回　2007 年 6 月 17 日(日) 3 時～5 時
テーマ：**戦国武将の文化活動－『月庵酔醒記』を通して**
講師：**服部幸造（人間文化研究科・教授）**

記念すべき第 1 回目は服部幸造先生の「戦国武将の文化活動」がテーマでした。今川了俊、太田道灌ら私も名前ぐらいは知っている武将たちが「文化人」としてはどんなことをしていたか、というような紹介があったのち、三河の国に出自の由来を持つ一式直朝（月庵）～のちに、幸手（さって：現在の埼玉県内）城主～というサムライが著した『月庵酔醒記』の話しに入りました。

この本は、一般の人間はもちろん、中世文学の研究者でもほとんど知られていない、読まれていない、読むのも難しく読んでもよくわからない、というないないづくしの書のようです。それをこのほど服部先生が注釈本として出版しました。もとはさほど長くないけれども、注釈にスペースを要して３巻本となる予定で、この４月にその上巻が出たばかりだそうです。誰もしてこなかった仕事だということで、6500 円にもかかわらず割とよく売れているとのこと。

この書物は月庵さんが読んだり聞いたりしたというネタの、聞き書き抜き書きがほとんどで、著者のオリジナルなものなどほとんどない！、しかもくだらない内容ばかりだ！と服部先生はこっぴどくこきおろしながらも、当時（16 世紀前半から末葉）の文化万般、すなわち芸能、俳諧などにはじまり、医術、武術や巷間説話などまで、ありとあらゆるジャンルについて網羅されているという意味では、文化の担い手だった公家・貴族たちの生活、風俗、遊びなどが活写されていること、そしてどちらかというとやんごとなき人々の文化の権威性が引き剥がされつつ、上から下へ、京から東国へと文化が伝えられていると解釈できそうだと解説されました。（いささか私流理解も混じっているかもしれませんので、ご注意を。）

服部先生の軽妙洒脱な語り口にもかかわらず、はじめのうちはやや硬い雰囲気もありましたが、一つふたつ質問がでるに及び、急速にサロンムードが高まり、質問や感想・意見が飛び交って、服部先生も適宜とぼけて下さるので、たいへんなごやかな空気につつまれるようになりました。(有賀克明 人間文化研究科教授)

◆ 新 刊 本 案 内 ◆

(2007 年 4 月～)

吉田一彦 著
『日本史の中の女性と寺院―女犯・妻帯・家―』
女性と仏教・東海ネットワーク(「女性と仏教・東海ネットワーク」ブックレット No.1)、2007 年

日本の仏教は、僧が結婚し、子孫があとを継ぐという、独特の妻帯世襲仏教になっています。諸外国の仏教と大きく異なる、日本仏教の最大の個性と言ってもよいでしょう。小著は、2002 年に「女性と仏教・東海ネットワーク」の依頼を受けて行なった講演を手作りのブックレットにしたもので、日本の妻帯世襲仏教がどのような歴史過程を経て誕生したのかを述べたものとなっております。「家としての寺」という日本仏教の特色について考えてみました。

服部幸造・美濃部重克・弓削 繁 編
『月庵酔醒記　上』(中世の文学 30)、三弥井書店、2007 年（中・下は未刊）

一色直朝(月庵)の著『月庵酔醒記』の注釈書。月庵は戦国時代末期の関東の武将。毎月名市大で行われている、名古屋を中心とした諸大学の 12 名による研究会での成果を結集したもの。『酔醒記』は、芸能・軍記・和歌・連歌・俳諧・漢詩・絵画・本草・医学・獣医学・易・暦・家訓・教訓・俗信・なぞ・ことわざ・仏教・神道・蹴鞠・香道・立花・武術・馬術・儀礼・宮廷故実・巷間説話などにわたるが、それらに詳細な注をほどこした。

佐野直子 編『オック語分類単語集』大学書林、2007 年

日常生活に必要な基本的なオック語(ラングドック方言)の単語を、項目別に分類して 6500 語収録。日本語、オック語索引つき。日本語の単語については、オック語を通して日本語を学ぶ人のためにアルファベット表記を付記。オック語の歴史、話される地域、方言、文学、音楽、教育についてなどのコラムも掲載。
(本書編纂のための研究にあたって平成 15-16 年度名古屋市立大学研究奨励費を頂きました)

＜Human & Social サイエンス・カフェ＞ 今後の予定一覧

・7 月 22 日（日）午後 3 時－5 時、後藤宗理教授
「大人になるってどういうこと？―大学生への調査結果から問題に迫る―」
・8 月 19 日（日）午後 3 時－5 時、阪井芳貴教授
「沖縄の祭りと芸能」
・9 月 16 日（日）午後 3 時－5 時、成田徹男教授
「ポテンコ？の言語学―ソシュール生誕 150 年によせて」
・10 月 21 日（日）午後 3 時－5 時、森田明教授
「1930 年代のヨーロッパ・ドイツの文化」

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第 9 回「エスペラントの現在」　森田　明（人間文化研究科教授）

今年 4 月 13 日、モスクワの“ロシア教育アカデミー”（行政とは別に、広く教育問題を扱う文部省所属の研究機関）主催で「外国語学習の準備段階（Propädeutik）としてエスペラントを導入することの可能性」をテーマに国際会議が開かれた。政府公認の専門家団体が提出した報告書に基づき、各界の有識者、ロシア議会および文部省の代表者らが一堂に会し、6 時間に及ぶ論議を交わした。私は報告書の作成に多少かかわった外国人の一人として招かれ、この珍しい集会に臨むことができた。

英語が世界共通語としての圧倒的な地位を築き上げた今日、なんと浮世離れしたことを、と首をかしげる向きも多いことだろう。

1887 年、帝政ロシア西端のワルシャワに住む眼科医ザメンホフが提唱した「エスペラント」は、ヨーロッパ諸語からバランスよくとった語彙を単純化した文法に乗せた、いわゆる計画言語である（あえて「人工語」という名称は避けておく）。民族や国家、宗教などの障壁を超え、差別感や被差別感のない交流をはかる、という精神に賛同してこれを学び、実践する人は、ナショナリズム全盛の時代にあっても絶えることがなかった。提唱から 15 年後、帝政ロシアの東端ウラジオストークで活躍するエスペラントクラブには、すでに我が二葉亭四迷が会員として名を連ねている。日露戦争後の 1906 年、日本で最初のエスペラント入門書（彩雲閣、東京）を出した二葉亭は、売れ行きの意外な好調ぶりに「本業以外のところで名があがるとは」と嘆いたらしいが、むしろ韜晦と解すべきだろう。トゥルゲーネフなどの翻訳を通じて新たな文学言語の創生を模索していた二葉亭にとって、エスペラントへの関心はそれなりの必然性に基づいていたはずである。

つい先ごろ（6 月 22 日）ベルリンの“ドイツ連邦情報局”が開催した「欧州連合（EU）の言語政策」と題する公開討論会では、次の三つが焦点となった。①EU憲章にのっとり、加盟各国の言語の多様性を尊重する。②英語をEUの公用語と定め、他の言語は地域語とする。③橋渡し言語としてエスペラントを導入し、加盟各国の言語の多様性を守る。このように、エスペラントのアクチュアリティは失われていない。さらに、来る 8 月 2～3 日、上智大学で開催の「第 5 回新渡戸記念国際シンポジウム」では日本語、英語にならんでエスペラントも使用される。

さて、モスクワでの会議だが、ロシア文部大臣に宛てた「エスペラントを中・高等教育に導入するための更なる調査研究を要請する」との共同声明を採択して解散した。声明の実効力について、私は残念ながら悲観的である。ユネスコが 2 度（1954 年、1985 年）にわたって各国政府に宛てた同じ趣旨の勧告があっさり無視された、という前例もある。会議の後のパーティーで隣りあったウクライナの言語学者が「大山鳴動してネズミ一匹、だったね」と話しかけてきたので、「生まれたのがたとえネズミ一匹でも、大山を鳴動させるポテンシャルがロシアに現存していることに深い敬意を表したい」と正直に答えておいた。

2007 年度科学研究費の補助を受ける研究題目一覧

土屋勝彦	越境する文学の総合的研究
中川敦子	自己制御機能の芽生えを探る:情動制御の個人差に関する3歳までの縦断研究
丹羽　孝	保育の質と第三者評価に関する日韓比較研究
吉田一彦	最澄および天台宗の思想・活動から見た神仏習合思想の受容と展開に関する研究
赤嶺　淳	オープン・アクセスに関する地域間比較－ｱｼﾞｱ境域世界における資源利用の動態
田中敬子	トランスナショナルなものをめざす文学的企て―フォークナーと中上を軸として
藤田栄史	生産革新・組織革新と雇用・人事システム－自動車産業・電気機器産業の実証研究－
福吉勝男	ヘーゲル「法・権利の哲学」の形成と展開に対するドイツ国制改革の影響に関する研究
松本佐保	人種問題をめぐる日本と英米の外交関係・英連邦と米国における日系移民問題を中心に
奥田伸子	イギリスにおけるエスニック・マイノリティ女性の労働とその変容:1951-1979
山本明代	東欧の政治･社会変動とディアスポラ社会の相互関係に関する研究－両大戦間期を中心に
石川洋明	子どもへの暴力･虐待の発生およびその予防教育の効果に関する調査研究
野中壽子	他者動作の意味理解に対する非対面型コミュニケーション依存度の影響
菊地夏野	東海地方における外国籍女性の生活から考察する日本のグローバル化とジェンダー
ランジャナ	日本仏教の国際ボランティアと国内におけるNPO・NGO団体の組織化に関する研究
井上禎男	放送･通信「融合」期における日仏比較公法学研究
山田美香	中国・台湾の教育近代化と少年犯罪－近代日本の影響

編集後記　暑中お見舞い申し上げます。ようやく新体制になって最初のニューズレターの発行にこぎつけました。文字ばかりですみません。(さ)

名古屋市立大学
人間文化研究所